



TITLE:

<批評・紹介> 京都大學東洋史研究
會編「中國隨筆索引」

AUTHOR(S):

小川, 環樹

CITATION:

小川, 環樹. <批評・紹介> 京都大學東洋史研究會編「中國隨筆索引」.
東洋史研究 1955, 13(6): 534-536

ISSUE DATE:

1955-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/139023>

RIGHT:

中國隨筆索引

京都大学東洋史研究会編

一九五四年十月 日本學術振興會刊行
A5判 一〇一八頁 定価 一〇〇〇円

中國の隨筆類の書物はおびただしい量であつて、その中に記述されている事からは多くの方面にわたり、單に歴史の材料として見ても、

貴重な知識を提供するものである。ところがその目録は大むね不完全であり、まったく欠けている本も少なくない。これらの書物をすべて通讀することは誰にでもできることではない。こゝに索引の必要がある。本書は唐代以後、清末民國初年にいたる約一千年間の隨筆百六十種の目録索引である。その體裁は宮崎市定教授の序文に見えるごとく、ほゞ太田爲三郎氏の「日本隨筆索引」の形に近く、それぞれの書物の一節ずつを大體もとの表題どおりにしるしたカードを主體とする。その表題の中の重要な事項を人名・地名の類はその第一字によつて、その他の事項は表題中から適當な一字をえらび出して、これを漢字音（わが國の慣用の漢音によるものが多い）の五十音順に排列してある。例えば宋の司馬光（司馬溫公）についての記事を検索しようと思う人は、シの司字の部を開けばよく、同じく司馬光に關する事實でも、「涑水記聞」という本が普通は司馬光の著述だとされているが實はそうでないことに關する記事はソクの涑の字の部にも重ねて收められている。またイの韻の字の處を開くと、次韻・和韻などについての記事がどの書物の何巻にのせてあるかを知ることができる。このようにある文字を含む二字以上の成語の場合、第一字で引けるものと、その最後の文字で引けるものがあるのは、一見雜然としているように見えるが、實はかえつて便利である。上にあげた例でいえば次韻の項目と和韻の項目とが同じページにあるのは、一方を引いただけで、それに關連のある他の項目もしよに見出すことができるのであつて、時間の經濟になることは確かである。表題が二つ以上の事がらにわたっている場合、その両方で引けるようになっていことが多いいもの（つまり重出・兩見している）やはり親切である。これらの點は編集者の苦心の存するとこ

ろであらう。

もしもこの索引によって中國の隨筆の内容がのこらずわかると考える人があったならば、あるいは失望するかも知れない。この書物は正確にいへば「隨筆の表題の索引」であつて、内容の索引ではないからである。しかし、すべての書物がそうであるように、その内容のどの點に關心を有するかは、讀者のそれぞれに皆ことなるものである。従つてもしも完全な内容索引が要求されるとすれば、目的によつて別々の索引が作られねばならない。たとえば政治史・經濟史・社會史、あるいは思想史・文學史その他種々の部門にわたる索引が編まれねばならないであらう。わが國で作られたこの種の索引で多くの方面に役立つと思われるのは、評者の管見に入つたところでは、物集高見の「群書索引」がある。だがそれは物集氏のほとんど全生涯の力によつて成つたものである。それだけの時間を費やすことは今日では不可能に近い。本書は五年をこえる月日（それは東洋史研究室の人々の餘暇をさいての仕事であつた）のたゆまざる努力の結晶である。われわれはこれに對し大きな感謝をさへげたく思う。

以上は主として本書の編集についての紹介と批評であるが、これに關連して本書に收められた書物の選び方に少く問題がある。それは巻頭の凡例に見えるごとく、百六十種の隨筆が收められているのであるが、その中には宋代の太平廣記や夷堅志、清朝では虞初新志や閩微草堂筆記のたぐいの普通は小説（フィクション）として知られている本と、宋代の容齋隨筆や癸辛雜識、清朝では嘯亭雜錄のような事實としての逸話を集録した本と、さらに宋の困學記聞、清朝の日知錄や十七史商榷や癸巳類稿のたぐいの事實の考證を目的と

した本、以上の三類が一樣にのせてあることである（もちろんこの三類の全部あるいは二類にまたがる本もあり、その外に東京夢華錄や燕京歲時記のような通常隨筆とよばれない書物も含まれる）。この三類の書物はおのおの目的を異にするのであるから、従つて讀者の利用のしかたも異なるはずである。それが一見無選擇に同じように各項目の中にならんでいることは讀者を迷わせる恐れなしとしない。だからこの點については編者が一言解説を加えておいていただいたなら、讀者の誤解を避けえたのではないかと私は考える。しかしそれも或いは私の無用のけんかかも知れない。賢明な讀者は適當な解題書（たとえば四庫全書簡明目錄または總目提要）を參考することによつて過失をせずすむであらうし、また利用の目的によつては、そのような顧慮を必要としない場合もあるからである。

最後に私が本書をひもとくうちに知りえた一つの事實をあげ、本書が私のような中國の單語の歴史に興味をもつものにとつても少なからず役立つことの一證としたい。それは「店」の字の用法である。この字は字書によると、たとえば辭海には「肆なり、貨を置わえ物をひさぐの處」とあつて、宋史趙普傳の「營新店規制」を引き、辭源も説明は同じで、たゞ唐の元稹の「店舍無烟宮樹綠」の詩句を引くのが異なるのみである。康熙字典には崔豹の古今注を引いて解釋してあるが、「店は置なり。貨を置わえ物をひさぐ所以なり」とあつて同じことになる（前の二つの字書は結局この字典の解釋をそのまま使つたことがわかる）。つまり店は日本語のミセにあたるとは分るが、それ以上のことは不明である。

ところが唐詩の中ではこの字はやゝ異なつた意味を有する。たとえば溫庭筠の有名な詩句「雞聲茅店月、人跡板橋霜」では、

店はたゞ何かを賣るみせなのではなく、旅館を意味すると考えられる。このことは佩文韻府の去聲二十九（卷八八）の店の條にあげられた多くの使用例を通覧すると明らかにするのであるが、こゝには一例だけを引こう。村店の下に靈筆の詩句「村店門を閉せり何の處にか宿せん、夜深けて遙かに渡江の船を喚ぶ」および羅隱の「村店酒旗 竹葉を沽り、野橋梅雨 蘆花に泊す」をあげてある。前の詩の村店は恐らく旅館であり、後の詩の村店は居酒屋である。唐詩ではこの二つの意味のどちらかであることが多く、その他のみせてあると思われる例は、ほとんどない。むしろ詩より以外では、韻府にあげた南史劉休傳（小店の下）同書邵陵王綸傳（邸店の下）のごとく、恐らく旅館でも酒屋でもないみせを指すらしい場合もあるが、隋書李諤傳（臨過店の下）では「行旅の依託する所なり」など、あって、やはり旅館の意味である。

このことをもって確かめるために私は本書を引いて見た。すると六八九ページのテン店の下には凡そ十四條の記事の表題が集録されている。そのうち太平廣記の四條が私には重要であった。卷一五九の「定婚店」は唐の李復言の續幽怪錄から引用され（佩文韻府にもこの條を引く）、原文を讀むと、これは幽冥の吏が男女の足に赤いなわを附けると、その二人は夫婦となるべき運命を定められるという有名な話なのであるが、そのはじめには杜陵の韋固というものが、貞觀二年、清河に遊ばんとして、宋城南店に旅次したとあり、そこでこの奇異に出あい、のちにその店が定婚店と名づけられたと終りにある。だからこの店も旅館である（韻府の引用は非常に短かく、店は何であるかは、それだけでは知りえない）。その他卷一九五の「京西店老人」と題するものも、唐の韋行規みずから言う、少時京

西に遊び、暮に店中に止まる……とあってやはり旅館であることが知られ、卷一八五の例もそうである。たゞ卷一三二の「店婦」のみは「長安城西側に店家あり」……とあるが、何の店であるか明らかでない。

右に述べたところによって、唐代の詩および小説の中では、店が旅舎の意味に使われた場合がすこぶる多いことは、はっきり明らかなったと思う。太平廣記には五代および宋のごく初の小説までを収めてあるからである。宋代には少し違つて來たようであつて、それは本書によつて東京夢華錄や夷堅志などを檢すれば大略を知ることができが、くわしい考證は省略する。われわれは古人の詩を讀んで、その中の語句の適確な意義をとらえることのむずかしいのに、しばしば大息するが、本書がそのような場合にも大きな助力をあたえてくれると知つたのはまことに喜ばしい。太平廣記にはすでに燕京大學の「引得」があつて、これも便利な本ではあるが、表題は必らず第一字で引くようになってゐるため、今の場合には本書に及ばない。本書の編集法の長所はこの一例によつても明白であらうと信する。

（小川環樹）